

◎ 連合会だより

12月、手作り忘年会と無茶々園のみかんの大騒動で暮れた。礼状が、日生協の元の会長の中林貞夫さんをはじめ、自治体の首長さんなどから届いた。直筆の礼状というのはいい。年が明け、年賀状の多くに書かれたみかんへの一言がうれしかった。いい年の幕開けだ。

みかんは、全国で6000箱を越えた。初めてのとりくみで戸惑いながらも、ドラマがあった。

鎌倉では、引退した全日自労の旧組合員のところをみかんを持って回った。久々の再会、忘れないでよく訪ねてくれたと、昔話に花が咲き、みかんを買ってくれ、食べた後、おいしかった来年も頼みたいということになったとのこと。

東京の病体生理研究所の事業所では、一人で100箱を売った組合員が出た。もちろん全国でトップ。「甘みもこく、酸味のバランスもよい。何よりも無農薬・有機栽培で安全」、そして、黄柳野高

校の金城先生の代表者会議での発言に感動し、労働者協同組合への期待を一層高めたことが重なって全国一のとりくみになった。

12月中旬を過ぎた頃、エンジンがかかり注文数がぐいと伸びた。労働者協同組合の組織力に無茶々園の片山さんもびっくりしていたが、組織力というよりは、無茶々園のもつみかんの生命力への素直な反応であり、その生命力が結びつけた人と人との出会いに底力があつたのではないか。

モノを動かすだけではないものをつかみたい、といっていた無茶々園片山さんの思いに通じるものが労働者協同組合のとりくみの中にあつたように思う。農業の再生、生命の再生のための共有材をともにつくっていく共通目標が見えてきた。新しい友との出会いが未来をつくる。

鍛谷 宗孝(労協連合会・常務理事)

◎ センター事業団だより

これまで常識とされてきた価値観が音を立てて崩れ、大きな危機感と反省を伴い95年は終わり、新年を迎えた。次の時代への模索が内外ともに問われる年。それは一定の結論と方向性を事実で示し、真実の実践の一つでも多く、高く積み上げねばならない緊張と苦勞、そして希望が交錯する年である。東西冷戦の終焉・バブル崩壊から始まった時代の変革期、21世紀へのラストスパートの5年間の幕が開いた。

「21世紀への労協の躍動は、すでに我々固有の喜びではなくなっている」。この事と「自分は一体何をなさんとするのか」を、1・2・3運動では意識したい。高協・第1次産業・生産など、万人に共通する生命、その源を再生する事業・運動・文化が見えてきている。理解し合い共感し合う人々は急速に増えてきた。年末には、幾多の苦難を乗り越え、盛岡赤十字病院と学習会・公開討論会を開き、本質的な絆の強化と組合員の成長と感動に身震いを覚えた。八戸市で高協づくりを85歳

で取り組もうとするRR厚生会の中居会長の思いと実践への共感も、すでに我々の回りに垣根がないことを実感させた。もっと広く、そして深く出会いと共感を共有しあい、「事実と実践」を全国が積み上げる1-3月期にしていきたい。

新年早々大阪・平野区から老健施設の給食提案の依頼がきたり、三重大付属病院で大きな期待を受け、提案を行うこととなった。やはり「大病院」と「高齢者」が今年の1・2・3の焦点である。ここを軸に仕事を増やすこと、それも単に増やすだけでなく、増やす意味・増えた結果に思いを馳せしっかり積み上げていきたい。委託の限界、自前の事業への挑戦がいわれる中、より鮮明に「仕事の意味」や「価値」を問う事抜きに、我々の存在は規定し得ない。多くの幹部・組合員が希望と不安に一喜一憂する中で新年を迎えている。今年は「正念場」でもあり、より本質に近づく年でもある。なんとしても意味ある100億へ一歩でも接近したい。古村 伸宏(センター事業団・事務局長)